
とある魔法の妖精尻尾（フェアリーテイル）

上やん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔法の妖精尻尾
フェアリーテイル

【Nコード】

N0877Y

【作者名】

上やん

【あらすじ】

不幸な男「上条当麻」の右手にはただ一つの異能の力が宿っていた。幻想殺し（イマジンブレイカー）それが異能の力なら、神の奇跡だろうが、どんな魔法だろうが、触れただけで破壊することができる力。上条当麻が幾多の幻想を殺した先に何があるのか？妖精の尻尾と幻想殺しが交差するとき、物語が始まる！！

プロローグ（前書き）

初心者ですが、よろしく願います。頑張っ
て書いていきたいと
思います。

プロローグ

世界には魔法があふれ、魔法を生業にする者（魔道士）もいる。
そんな世界の東洋の国に、一人の少年がいた。

少年の名前は、「上条^{かみじょう} 当麻^{とうま}」。
彼は普通の少年だった。外見も特に特徴もなく、性格も普通の少年だった。

だが、たった一つだけ彼には他の人とは違うところがあった。

少年は、

『不幸』

だった。

少年の周りでは、相次いで『不幸』な出来事が起こる。それが少年の日常だった。そんな少年を周りがどんな目で見るとかは火を見るより明らかだ。周りの子供たちばかりでなく、大人たちでさえ少年を遠ざけていった。少年が離れば、『不幸』も遠ざかる。そんなバカげた話を誰もが信じ、少年には居場所が無くなっていた。

そんな少年を心配した両親は、少年と共にそこを離れることにした。『不幸』を気にすることがなくなるかもしれない新しい場所、魔法が盛んな国「フィオーレ王国」に。そうすれば少年にも幸せが訪れることを願って。

しかし、それでも少年は『不幸』な人間として扱われ始めてしまう。

ついに見かねた両親は、彼を見捨てることを決断してしまう。

当然、両親を失った少年は生きるすべを失い、途方に暮れてしまう。
そんな時に、少年は思う。

『不幸』だと。

しかし、運命は少年を見捨てはしなかった。少年の人生にとって、
運命の出会いを迎えることになる。
そして、少年にとってそれは間違いなく

『幸運』

な

出来事だった。

???：「お前さん、こんなところでどうしたんじゃ？」

老人の声が聞こえた。しかし、少年はその場に倒れてしまう。体が
限界に達したのだ。意識が遠のく。

???：「おい!!??少年、どうしたんじゃ??おい、」

一人の老人と一人の少年が運命の出会いを果たす。

妖精の尻尾フェアリーテイルのマスターマカロフと、不幸な少年上条 当麻の二人が。

妖精の尻尾フェアリーテイルと幻想殺しが交差するとき、物語は始まる!!

第1話 ミニマムじいさんと怖いばあさん（前書き）

二話目です。上条さんの話し方は子供のころから大人ぽかったとい
うことで。

では投稿です。

第1話 ミニmamじいさんと怖いばあさん

SIDE：当麻

「くく、ああ、なんだここ？ふああ、いったいどこでせう？」

目が覚め、体をベットから起こしてみると、周りには見覚えがなかった。そういえば俺どうなったんだっけ？運がいいやつだったら心優しい誰かが倒れている所を見つけて、助けてくれたとかそういう展開なのだろうが、不幸な上条さんのことだ。

「もしかしたら、変態科学者に拾われて、体をいじくられたり、食欲旺盛な化け物に拾われ、家に持ち帰って今から食べるところかなのかくく！？やっぱ不幸なのかー？」

などと、傍から見たら独り言を叫んでいる危ない少年が一人いる状態なのだが、するとそこへ、

「???：「おお、目が覚めたんじゃない？心配したぞい。」

声をかけられた方を向いてみると、ミニmamサイズの老人がぽつんと立っていた。

「えくと、あなたが俺をここへ？」

「???：「そうじゃ。町でいきなり倒れるから、驚いたわい。もう体は大丈夫かの？」

「ああ、はい。なんとか。ただー、あのく、もう一つだけお願いが

あるんでせうが。心優しいおじい様」

????:「うん?なんじゃ」

返答されると、俺は即座にベットから飛び降り、土下座の態勢に入る。『伝説のジャンピング土下座』である。いろんな不幸にあつてきた上条さんならではの技だ。子供のうちから、こんな技を習得しているのはどうかと思うが、そこは考えないようにしよう。

「少しでいいので、できればこの貧乏で空腹に苦しんでいる上条さんに食べ物恵んでくれるとありがたいのでせうが。」

……少しの沈黙が訪れる。そして、

????:「つつぶ。がーはーはーは。元気なガキじゃのう。少し待っておれ。今、ポーリュシカの奴が持つてくるところじゃ。」

おお!・・・なんていい人なんだ。この人は。不幸な上条さんにもようやく幸運というものが訪れたのでせうね。このじいちゃんが、救世主に見える。

「本当にありがたき幸せ。この恩は必ずお返ししますゆえ、あ、え」と名前をまだ聞いてなかったんですけど、私めは、上条 当麻であります。」

????:「おお、自己紹介がまだじゃったのう。わしはマカロフ、マカロフ・ドレアーじゃ。魔道士ギルド妖精の尻尾のマスターをやつておる。」

「へええ、ギルドのマスターなんですか。・・・」

・
・
・

「つて、はあああああ！！！？！？ギルドマスターー
？！？しかもフェアリーテイルー？！？」

魔道士ギルドフェアリーテイル、フィオーレ王国に来て少ししか経
つてない俺でも知ってるギルドじゃねえか。そんなギルドのマスタ
ーだとおおお！！！？！？しかもこんな、小っこいじいさんがああ？
??

ガチャリ

そんな世の中の不思議に驚愕していると、ドアが開いてその方向を
向くと、おばあさんが立っていた。

????:「……………」

おばあさんは入ってきて何もしゃべらず持ってきた食事が乗った
おぼんを机に乗せただけだった。このおばあさんがポーリユシカさ
んとやらのなか？それにしてもマカロフさんとどういう関係なんだ
??二人は一緒に住んでいるっぽい。

ああゝゝ、なるほど。答えが出た俺はポーリユシカさんに聞いてみ
る。

「えーと、マカロフさんの奥さんでせう?」

ドガン。という効果音とともにポーリユシカさんが投げた杖?のような物が俺の顔に直撃していた。

「なんで??」

ポーリユシカ：「ノノ気持ち悪いことを言うからだよ。いきなりマカロフがあんたを連れてこの家に乗り込んできて、あんたを治せと言ってきたのさ。まあ、ただの空腹と睡眠不足だったらしいけどね。ほら、その食事を食べてとっとと出ていきなさい。あたしは人間は嫌いなんだよ。」

「は、はい。」

あまりの勢いに思わず、返事をしてしまう。でも、食ったら出ていかないとな。俺は『不幸』を呼んじまうからな。これからどうすっかなああ。もう、両親はいないしな。一人で生きれる道を探さないと~~~~ はあ、不幸だ。

そんなことを考えていると、ポーリユシカさんとやらに話しかけられる。

ポーリユシカ：「その前に、一つだけ聞きたいことがある。」

「なんでせう??」

ポーリユシカ：「お前に回復の魔法をかけたとき、何かがその魔法を打ち消した。跡形も残らずね。おまえには、いったいどんな力があるっていうんだい？」

マカロフ：「わしもそれは気になった。寝ているときにもかかわらず、魔法を打ち消すなんてありえんことじゃからのう。どんな力を持っておるんじゃない??」

はは・・気づかれたのか。俺の『不幸』の原因だと思っている右手の力。言いたくなかったが、なぜかこの二人には言ってもいい気がした。

「俺の右手は…」

幻想殺し（イマジンブレイカー）って言って、どんな魔法だろうが、神の奇跡だろうが、触れただけで破壊することのできる力なんだ。そして、俺の『不幸』の原因でもあるんです。」

第1話 ミニマムじいさんと怖いばあさん (後書き)

思った以上に、話が進まない。
小説書くの、難しい。

第2話　不幸と勝負と道しるべ（前書き）

なんか誰だよ、こいつみたいなキャラになっちゃってしまっ。そこは温かい目で見てください。

第2話　不幸と勝負と道しるべ

「俺の右手は…幻想殺し（イマジンプレイカー）って言って、どんな魔法だろうが、神の奇跡だろうが、触れただけで破壊することのできる力なんだ。そして、俺の『不幸』の原因でもあるんです。」

マカロフSIDE：

信じられん。当麻の話を聞いて、最初にそう思った。そんなバカげた力があるなどと。しかし、こんな子供が他にポリュシカの魔法を打ち消した理由が説明できん。素直に疑問に思ったことを問う。

「その話は本当なんじゃな？」

すると当麻は、少し笑いながらも、

当麻：「信じられないかもしれないけど、本当ですよ。こんな力がありえないってのは分かってるけど、それでも間違いなく俺にはそんな力が宿ってる。それだけは絶対なんですよ。」

嘘を言っているようにも見えなかったし、信じるしかないじやろう。

「それは右手にしか効果がないんじゃない？」

当麻：「ええ、俺の右手首から先にしかこの力は宿ってないんですよ。なんで俺にこんな力が宿っているのかはわからないんですけどね。」

右手にしか効果がなくとも、この力は絶大じゃ。ならば、

「それだけ強力な力を持つていながら、なぜおまえさんは『不幸』なんじゃ？」

それを聞くと、当麻は少し俯いてしまい、それでも口を開け、

当麻：「たぶんなんだけど、この力は異能の力なら善悪を問わず問答無用で打ち消しちまうから、たとえそれが神様のご加護だったり、運命の赤い糸とかそういういたいものでさえ打ち消してるんじゃないかなあーと俺は思ってます。だから、この右手が空気に触れてるだけでどんどん不幸になっていくってわけですよ。はっはっはっー
ー！」

最初は真剣に話していた当麻だったが、最後はおどけたように語っている。その顔は誰が見ても悲しい表情でしかなかったのじゃがのう。しかし、ワシはそれを聞いて一番気になったことを聞く。

「それはお前さんが倒れた事と関係があるんじゃない？」

すると当麻は、体をビクツとさせ、顔には苦悶の表情を浮かべ、そして少しの沈黙の後、

当麻：「・・・さっきも言ったとおり、俺がいるだけでそこに不幸を呼んでるようなものだから、周りが俺を受け入れてくれるはずがねえし、唯一味方だった両親も、こっちへ引越してきてても不幸な俺を見かねて、捨ててどっか行っちゃったしな。それでこれからどうしようかなーとか思ってたら急に意識がなくなっていって、そこ

でマカロフさんに出会ったんです。」

なんということじゃ。わしが想像してたよりも、この少年は深い傷を負ってしまっており。しかしそれでもこの少年は人生を捨てずに前向きに生きようとしておる。ならばワシがすべきことは

「おまえさん、これからどうするんじゃ？いく当てでもあるのかのう？」

当麻：「どこか仕事できるところでも探そうと思ってます。まあ、世界は広いんだしどこかに俺みたいな不幸な人間でも雇ってくれるような優しい場所があることを願うばかりですの事よー。」

その答えを聞き、ワシはにいつと笑ってしまう。そんなワシを見て、当麻は怪訝そうな表情を浮かべたがそれを無視し、

「ならどうじゃ？わしのギルドに入ってみるのはどうかのう？」

しばらくの沈黙の後、啞然としてますよと言わんばかりの顔になっておった当麻だったが、何とかその大きく開いた口を動かし、

当麻：「・・・えーと、マカロフさん？さっきの俺の話を聞いてました？俺がいるだけで不幸を呼んじまうし、この右手のせいで俺には魔力なんてものは無いから、どんな簡単な魔法ですらできないし、それになりより魔道士ギルドって魔法を使う人が入る場所なんだろ！？そんなところに、魔法能力LEVEL0の上条さんが入ったところで、床掃除やらトイレ掃除をやるのが精いっぱいだよ！？」

なんだかぐちぐち言っておるが、そんなことは右から左へ受け流し、

「いちいちうるさい奴じゃのう。せつかく働き口を紹介しとるつち
ゆうのに。まあとにかく、つべこべ言わずにギルドに来んかい。」

そう言つてワシは魔法を使い、右手で当麻を持ち上げる。もちろん、
当麻の右手には触れないように。

「それじゃあ。ポーリユシカ、世話になったのう。恩にきるわ
い。」

そう言つてワシはポーリユシカの小屋を出ていく。しかし、いきな
り持ち上げられ、ギルドに連れて行くと言われれば、当然当麻は黙
っているはずもなく、

当麻：「いやいやいや、なんでいきなりこんな展開になっているん
でせう！？上条さんはそんなヘンテコルートに入った覚えはあり
ませんですの事よ。それより、まずは俺を降ろせー！！！」

「ごちやごちやうるさいのう。もつと年寄りをいたわらんかい。ま
ったく最近の若いもんは。」

当麻：「いやいやいや、子供とはいえ人一人を軽々と持ち上げてそ
のうえ持ち上げたまま走るっていうのは世間の言う年寄りのカテゴ
リには含まれないと上条さんは思うのでせうが！！ていうか、この
ままなんだかんだ言つて俺をギルドに連れて行くつもりだろ！！人
の話を聞けーーーー！！！！」

「ああ、なんて言ってるか全然聞こえんわい。年は取りたくないも
んじゃのう。うーん、ふむふむ、おおそうか。そんなにギルドにい
きたいとは。ならスピードアップで行ってやるかのう。」

当麻：「こんな時だけ老人スキル発動！？しかもどんだけ都合のいい耳をしてやがるんだ！？言っていないからね。上条さんはそんなことは言ってませんのことよ。てか、本当にどんどん早くなってるし、この位置だとすげー怖いし。ああもうなんていうかあれだ。今日は言わないと思っていただけ、言いますよ。不幸だーーーーー！ーーーー！！！」

S I D E O U T

当麻 S I D E：

どうも。私こと上条当麻は現在不幸真っ最中である。いきなりあのくそジジイ（マカロフのこと）に持ち上げられそのまま、ギルドに連れてこられ（強引にかつ乱暴に）今はギルドの前にいるわけだが、俺はそんなところで、orzのような体勢になっていた。理由はもちろん、あのジジイのせいだ。いきなり体を持ち上げられ、そしてそのままとてつもないスピードで走っていきやがった。俺が、どういう状態になるかは少しはわかっていただけたであろう。顔は風圧で歪んでまだいてえし、あのジジイ何回も俺を落としそうになるし（そのたびに笑っていたので、本気で殴りたくなったのは別の話）そんな状態が続けば人間だれでも、orzのような体勢になるだろう。

マカロフ：「なんじゃ、そんなにへばりおって、まったく、だらしないのう。」

誰のせいだよ、誰の！とも思ったがここまで来たら諦めるしかないのだろう。非常に不本意だが、

「じゃあとつとと行ってみようぜ。妖精の尻尾、フェアリーテイルへ。」

マカロフ：「おお、なんじゃ？いきなりやる気になったのう。」

「ここまで来ちまったんだ。だったら魔道士ギルドっていうのがどういうところなのか知ったって損にはならないだろ。」

そういい俺は歩き出す。そしてギルドの扉の前まで行く。

「入っていいのか？」

「おお、もちろんじゃ。歓迎するぞい。」

そう言われ、俺は扉を開ける。そこで俺が見たものは、

ヒュウン

そんな音とともに、高速で飛んできた椅子だった。しかもそれは狙い澄ましたかのごとく俺の元へとやってくる！いきなりの事態に俺の体は反応できるはずもなく、

「ぶばおあああ！！？？」

そんな情けない声をだし、椅子とともに空中へ放り出される。そして地面を数回転がり、ようやく勢いが止まり、痛む体を何とか動かし、元いた扉の前へ戻り、そして

「なんなんだよ！？どんだけ熱烈な歓迎だよ！？？扉開けた瞬間いきなり高速に椅子が飛んでくるって！？？どんだけだよ？あんたのギルドはーーーー！！！」

そう俺が叫びながら言うと、

マカロフ：「おほほ、げっ元気があっていいギルドじゃろう？それにしても少し暴れすぎじゃのう。少し止めてくるからそこで待つとるんじゃよ。」

あわててじいさんはギルドに入っていく。逃げたな、あの野郎。そんなことを考えているうちに、戦争でもしているんですか？と聞いてみたくなるほど、ギルド内は荒れていた。そんな中に入っていたじいさんは、いきなり体を巨大化し始め、

マカロフ：「こらー！！やめんか、バカたれどもが！！！」

そうじいさんが叫ぶと、まるで時間が止まったかのごとく、ギルド内はピタリと動きを止めた。そして、

「おお、マスター。帰ってきたのか！」

「おい、ジジイ。今までどこ行ってたんだよ？」

「おお、怖い怖い。」

いろんな人たちがじいさんに言葉を発していた。そんな中で俺は、何かできるわけでもなかった。ただ扉の前で呆然と立ち尽くしていた。はあ、なんていうか不幸だ。

少し待っていると、じいさんが俺の方へやってきて、

マカロフ：「ふう。待たせたのう。では、改めてようこそ。フェアリーテイルへ。」

そういわれ、俺は生まれて初めて魔道士ギルドというもののへ入っていった。

そこで俺が見たものは、今度こそ椅子が飛んでくるわけでもなく、見渡す限り人でいっぱいだった。さっきはあまりの出来事で考える暇もなかったが、よく考えれば、ここにいる人全員が魔道士なんだよな。そんなことを考えていると、

マカロフ：「どうじゃ？魔道士ギルドは？」

当麻：「ここにいる人たち全員魔道士なんだよな？」

わかりきったことを俺は聞いてしまう。他の人にとっては当たり前のことでも、俺にはやはりすごいことなのだ。魔力がない俺には。

マカロフ：「当たり前じゃ。ここはなんせ『魔道士』ギルドなんじやからのう。いろいろ見てきても構わんど。ただし、置いてあるものに、むやみやたらに右手で触るのはよした方がよいぞ。高価なものを壊したら弁償じゃからな。」

「お、おう！わかった。」

置いてあるものには右手で触れないようにしよう。そう心に決め、言われたとおりに、俺はいろいろ見て回ることにした。

「本当にいろいろあるんだな。酒場とかあるし。はは。何でもありそうだな。本当に。」

そうやっていろいろ見て回っていると、同年代の少年と少女が机でしゃべっていた。そこで俺は驚愕する。少女の方は普通だ。普通なんて言い方は失礼だが、かわいらしい少女だった。それより問題は隣にいる目つきの悪い少年の方だった。なぜ、なぜだ、なぜだろうの三段活用。なんでこいつは

「なんでおまえは、ぱんついっちようなんだよー！！??」

思わず俺は突っ込んでしまう。だって、そうだろ！なんでこいつはパンツ一丁で過ごしてるんだよ！？なんだ？なんかのいじめなのか？それとも罰ゲームとかそんな感じなのか？そんなことを考えていると、俺に突っ込まれた少年は、

「????：「うお！？しまった。またかよ。で、お前誰だよ？新入りか？」

「いや、お前がパンツ一丁な件についてはもう終わりですか！？ていうか、それ自主的にやってたのかよ！????」

駄目だ、やっぱりこのギルドにはまともな奴はいないらしい。なんていうギルドだよ。噂では少し聞いてたけどここまでハチャメチャなギルドとは。こんなところに俺は誘われていたのか。やっぱり不幸だなー。俺。

???：「気にしないで。グレイはいつもこんな感じなの。あなたは新入りさん？あたしはカナ、それでそっちはグレイって言つの。よろしくね。それであなたは？」

そう言つて、カナという少女が俺に礼儀よく話しかけてくる。なんていい子なんだ。ここへ来て俺は初めて、まともな人に出会つたらしい。なぜだかそれがすごくうれしく感じた（彼はまだ知らない。彼女が遠くない未来に朝も、昼も、夜も関係なく酒を飲んでいる飲んだくれになるということを）

「ああ、俺は上条当麻だ。よろしくな。新入りじゃなくて見学してるんだよ。」

カナ：「そうなんだ！。それで上条君はどんな魔法を使うの？」

「いや、俺は魔道士じゃないんだ。だから魔法は使えませんのことよ。」

そう言つと、二人が啞然としている。なぜだろう？と思つてみると、
グレイ
変態が、

グレイ：「はあ？魔道士じゃない！？ここは魔道士ギルドだぞ。魔道士でもないやつが何で来てんだよ？」

ああ、そういうことか。だけど、どうしよう。俺には特殊な力があるんですよ。と言つのは簡単なのだが、信じてくれるわけないしな！、特にこの変態は絶対信じなさそうだしな！。うーん。どうしよ。

マカロフ：「なんじゃ、当麻。もう友達を作ったのか？これでギルドに入っても友達には困らないのう。」

茶化すように入ってきたじいさん。何度も言うけど俺は入るなんて言っていないからな。すると変態^{グレイ}が、

グレイ：「おい、じいさん。どういうことだよ！？なんで魔法も使えないやつをギルドに入れようとしてんだよ！？」

変態^{グレイ}が怒気を込めながら、しゃべっている。すると、じいさんが俺に耳打ちしてくる。

マカロフ：「なんじゃ、お前さんまだ自分の力しゃべっておらんのか？」

「ああ、どうせ話しても信じてくれないと思ったし、どうすっかなーとか思ってたなら、じいさんが来たというわけですよ。」

ふむ。と少し考え込む様子を見せる。そして少しの間をあけ、

マカロフ：「なら、当麻とグレイ、ふたりが戦えばよかるう。」

・・・

しばらく言葉を失った。何を言っているのやら。このおじいちゃん
は、どうやったらそんな結論になるんでせう？俺の心を読んだか
のように、じいさんは説明しだす。

マカロフ：「グレイは、なんで魔法も使えないこんなガキをワシがギルドに入れたがつているのか気になっていて、当麻は魔道士というものがどんな者か気になっておる。なら二人が戦えば済む話じゃろつ。名案じゃろ。なはは。」

はっはっは。もう笑うしかねえよ。なぜこのおじいちゃんはこのなとんでもない案を自信満々に言えたのだろう？

「そんなとんでもない理由で戦えるわけねえだろ。ほら、^{グレイ}変態も言つてやれよ。」

^{グレイ}変態に話を振ると、グレイは不敵に笑いながら、

グレイ：「ああ、いいぜ。その勝負のつてやるよ!!。ぼこぼこにしてやる。ていうか、今お前、俺のこと変態と書いてグレイと読まなかったか!?俺は変態じゃねえぞ。」

・・・駄目だった。やはりこいつは駄目だった。なぜ今の流れで話に乗るんだよ？

「^{グレイ}変態が乗ったところで、俺は絶対にやらねえぞ。そんなくだらない話。後、昼間っからパンツ一丁でうろついてるやつが変態じゃないわけがない。」

すると、じいさんが呆れたように言っつ。

マカロフ：「いつも、なにかといってくるのう。お前さんは。ならこついうのはどうじゃ?お前さんが勝ったら、もうワシはお前さんを無理にギルドに誘ったりはせんわい。これでどうじゃ?」

その言葉を聞き、嬉しい筈なのに、なぜかそんな感情は湧き出てこず、なぜだかモヤモヤとしたものが湧き出ていた。そして、それはなぜか戦えばわかるような気がした。ならば、俺がやることは一つしかねえか。

「・・・わかったよ。そういうことなら、相手になってやる。」

そう俺が言つと、^{グレイ}変態が、

グレイ：「へ、ようやくやる気になったか。表に出る。」

そう言つと、^{グレイ}変態は歩いていく。俺もそれについていくように歩き出す。後ろでじいさんが笑っていることに気付かずに。

S I D E O U T

??? S I D E

グレイと見たこともないガキが戦うことになったらしく、そういうことが大好きなほかの連中はすでに表に出ていた。まあ、俺もなんだけどな。

グレイ：「速攻で終わらせてやるよ。」

当麻：「は、変態ヤローなんかに負けられるかよ。」

戦う前に二人は口論を始めていた。いやあ、若いつていいねえ。し

かし、俺は少し気になったことがあり、マスターの元へ向かう。

「おい、マスター。どういうことだよ。グレイと見たこともないガキをいきなり戦わせるなんてよ。何企んでんだ？マスター」

マカロフ：「おお、ギルダーツか。何も企んでないわい。何もな。」

そう言っているマスターの顔は、何かたくらんですよと言わんばかりの笑みが浮かべていやがった。

「まあ、いいけどよお。それより俺が気になってるのは、あのガキのことだよ。あのガキからは何も魔力が感じられねえ。なんなんだ、あのガキは？」

マカロフ：「まあまあ、この戦いを見れば、おぬしの悩みも解決しとるじゃろつて。」

そう言いマスターは前に出ていく。そして、

マカロフ：「それでは、二人とも準備はいいかのう？」

グレイ 当麻：「「ああ！！」」

マカロフ：「それでは、始めい。」

その瞬間先に仕掛けたのはグレイだった。

グレイ：「アイスメイク ランス 槍騎兵」

そういったグレイの手からは、何本もの氷の槍が出てき、それはすべてガキの方へ向かっていく。そして、

ズガガガガガ　ドッウー

そんな音とともに、砂埃が立ち上る。

あちゃー、もう決まっちまったのか。ギャラリーもあっさり勝負が決まったことに不満があるようだった。そんなことよりも、

「おい、どういうことだよ？マスター。簡単に決着ついちまって、これで何がわかるっていうんだよ？」

マカロフ：「安心せい、まだ勝負はついとらんぞ。」

「はあ？ただのガキがああ攻撃を喰らって立ちあつ！！！」

俺は驚いた。砂埃が晴れていき、そこには、右手を前に突き出し、無傷で立っているガキがいた。そして彼は笑っていた。そして彼は何かを言った。遠くて聞こえるはずもなかったが、なぜか俺は何を言っているか分かった。

当麻：「なんていうか、不幸っーか・・・ついてねーよな。オマエ、本当についてねーよ。」

なんなんだ、あのガキは？おもしれえ。

SIDE OUT

当麻SIDE

あつぶねえええ。マジで死ぬかと思ったああ。いきなりまさか氷の槍みたいなのが出てくるとは。もう少し量が多かったら間違いなく串刺しになっていただろう。それにしても氷の魔道士なのか。俺との相性はまあまあいいってところか。 그레이を見ると、だいぶ慌てていた。そりやそうだろう。自分の魔法が、魔法を使えないやつに効かなかったのだから。このチャンスを生かすしかねーよな。俺はできるだけ平静をよそおい、そして相手に告げる。

「なんていうか、不幸つーか・・・ついてねーよな。オマエ、本当についてねーよ」

そういうと、 그레이は後ずさりしていた。その瞬間、俺は駆け出す。右手を強く握りしめながら。この拳が届く範囲に入るために。ただ真っ直ぐに。

SIDE OUT

그레이SIDE

ありえねえ。俺の攻撃は確実にあいつに命中したはずだ。なのに、
なんでありつは、魔道士でもないあいつが、無傷でそこに立ってや
がるんだ！？そして何よりあいつはなぜこの状況で笑ってやがるん
だ？？何者なんだよ、あいつは？考えがまとまらないでいると、あ
いつは言う。ただ静かに、俺の方を睨みつけながら、

当麻：「なんていうか、不幸っーか・・・ついてねーよな。オマエ、
本当についてねーよ。」

この状況でなんでそんな言葉が出てきやがるんだ？あいつには何か
あるってのか？そんなことを考えていると、あいつは走り出してき
た。真っ直ぐにおれの方へ。いけねえ。今は余計なことは考えずに、
こいつをブツ飛ばす。

「アイスメイク ハンマー 大槌兵」

これで決まるはずだ。そう思っていると、あいつは右手を上に掲げ
た。そんな細腕で何とかなる魔法じゃねえ。これで終わる。しかし
そんな考えは覆される。あいつの頭上に落としたハンマーはあいつ
の右手に触れた瞬間、

バギン

そんなガラスが割れたような音がした。そしてその瞬間、俺が作り

出したハンマーは消えた。

「なっ!?!」

そんな言葉が思わず出てしまう。今何が起きた!?!ただ右手に触れただけだった。それだけで俺の魔法は消えていった。こいつはいたいなんなんだ!?!だがあいつは考える暇すら与えない。気づくと既にあいつは迫っていた。まずい。とにかく距離を。

「アイスメイク 盾」
シールド

あいつと俺の間に巨大な壁を作る。これであいつは止まる。そう、止まるはずだった。だが、

「うおおおおおおおっっっ!」

そんな叫び声を上げながら、あいつは右手を盾へ打ち付ける。子供のパンチで壊れるような盾ではない。そう、そのはずだった。なのに、

バギン

再びそんな音が耳に響いた瞬間、俺が作り出した盾はハンマーと同様に消えていく。跡形も残らずに。この現実には驚かないはずがない。しかし、その一瞬の隙が命取りになった。目の前に迫ったあいつの右の拳が俺の顔面に突き刺さる。

「じはあ?!」

あいつの拳は思った以上に威力があり、俺は地面に倒れる。意識は何とかもったが、立ち上がれそうにない。ちつくしょう。どうなつてやがる?・・倒れた俺は、ただあいつに聞く。

「お前、なんなんだよ?」

ただそれだけが知りたかった。するとあいつは、俺の方へ顔を向け、

当麻：「上条さんは普通の人間だよ。ただ一個だけ他の人とは違うつてだけさ。」

そついうあいつの顔は、どこか悲しさを見せていた。なるほどな。

「お前もいろいろあつたんだな。」

俺がそう言つと、あいつは驚いた表情で俺を見てきた。凶星かよ。

「前にじいさんが言つてた。フェアリーテイルの魔道士はみんな何かを抱えてるつて。お前をじつちゃんが誘つてるつてことは、お前にも何かあつたのかつて思ったけど、凶星らしいな。」

当麻：「おまえ『も』つてことは、お前にも何かあつたのか?」

そう聞いてくる。普段なら絶対に言わねえが、なぜか今は素直に言おうと思つた。思いつきり殴られて、おかしくなつちまつたのか。

「俺は両親を化け物に殺され、俺を拾ってくれた人も俺のせいでいなくなっちゃった。」

あいつは、少し驚いた表情を見せるが、すぐに戻り、

当麻：「そうか」

簡単に言ってくる。は、同情でもしてんのかよ。だったら、言つてやる。

「でもな、俺を拾ってくれた人はこう言ってくれた。お前の闇は私が封じようって、歩き出せ、未来へって言ってくれた。俺はそれを信じてる。お前に何があつたのかは知んねえけどよ、いつまでもうじうじしてんじゃねえよ。てめえがそんなに弱かったら、てめえに負けた俺が情けなくなっちゃまうだろ。」

当麻：「・・・。は、はは、あははは。そうだよな。まさかこんな変態ヤローに言われて気づくとはな。嬉しいんだが、悲しいんだが、よくわっかんねえや。」

「だから、俺は変態じゃねえよ。少し脱ぎ癖があるだけだ！」

そう言いあいながらも、俺たちは笑っていた。確かに笑い合っていた。すると、

がやがや　ざわざわ

騒がしい音が近づいてくる。勝負が終わったと思って、フェアリーテイルの連中が来やがった。

S I D E O U T

当麻 S I D E :

はは。そうだよな。いつまでもうじうじするな、か。俺は右手を見つめ、そして思いきり右手を握りしめ、思う。今までの俺は、自分一人が不幸になっていると思ってた。そして、それはこの右手のせいだっけと考えていた。

でもそんな考えは俺の甘い幻想に過ぎなかった。だれだって、何かを抱えて生きている。それに重いか軽いかなんてそんなものは関係ない。ただそれを受け止めて、進めるか、立ち止まっちゃうかが重要だったんだ。俺はずっと立ち尽くしていたんだ。すべてをこの右手に押し付けて、はは。本当に笑えてくるよな。でも、これからはこの右手とちゃんと向き合って、俺も前へ進まなくちゃいけないよな。そんなことを決心していると、急に後ろから、

「よう、お前スゲーな。 그레이の魔法が消えたけど、あれどうやったんだ？」

「お前魔法使えないって聞いたけど、さっきのどうやったんだ？」

どうやら俺たちの戦いを遠くで見ていたフェアリーテイルの他の人たちがいつの間にか来ていたらしい。そして俺は質問攻めにあう。どうすりゃあいんだ？そんなことを考えていると、

マカロフ：「よさんか。バカたれども。当麻が困っておるじゃろう。それと、当麻はワシと話があるから、お前さんたちは早くギルドに戻らんかい。」

そうじいさんが言うと、ブーブー文句を言いながら、全員おとなしくギルドに帰っていった。

全員が帰ったのを見届けるで、じいさんの方を見ると、もうひとりでかいおっさんが立っていた。

ギルダーツ：「おお、ごくろうさん、面白れえ戦いを見せてもらったぜ。」

そういわれ、俺は少し戸惑いながら聞く。

「えーと、あなたは誰でせう？俺は上条当麻っす。」

ギルダーツ：「おお、自己紹介が遅れたな。俺の名前はギルダーツ。フェアリーテイルの魔道士だ。」

そう言って、俺たちが自己紹介をすると、

マカロフ：「自己紹介は済んだようじゃのう。それより、戦いご苦労じゃったのう。それにしてもお前さん、ずいぶん戦い慣れてるようじゃったが？」

「まあ、厄介ごとにはよく巻き込まれてたからな。そうしてるうちに戦い方も身についていったってわけだな。」

ま、そのおかげでグレイには勝てただけだな。自慢できることじゃないんだけどな。

マカロフ：「お前さんが勝ったんじゃから約束は守ろう。じゃが、これだけは聞かせてくれい。これからどうするのかをのう？」

「そうだな。これからはこの右手を何とか有効に使える方法はないか考えていこうと思ってる。『不幸』とかそんなのは関係なくて、この力を誰かの役に立てる方法はないか。」

そう俺が言つと、二人はなぜか笑いだしていた。俺が何か不安を感じていると、

マカロフ：「なら話は簡単じゃて。ギルドに入ればよからう。」

「いや、だから俺みたいな魔法を使えない人間がギルドに入つたつてできることがないだろ！？」

ギルダーツ：「いや、できることはたくさんあるぜ。お前は魔法を使えなくてもグレイに勝つたじゃねえか。」

マカロフ：「お前さんの右手は魔道士相手には切り札的存在じゃからのう。世界にはのう、いい魔道士だけじゃないんじゃ。悪の道に走り、悪のためだけに魔法を使うものがある。そんな連中は誰かを不幸に陥れようとする。お前さんがいれば、お前さんの力を使えば、誰かを幸せにできるはずじゃ。」

・俺の力で誰かを幸せに、か。もしも、本当にそんなことができるなら、俺は

「でもそういうやつらってやっぱり強いんだろ？そんな相手に俺一人で勝てるのかよ？」

マカロフ：「何も一人で勝つ必要はないじゃろ。一人で勝てなければ二人で、二人で勝てないなら、三人で、そうやって助け合っのがギルドじゃ。それに、安心せい。お前さんを強くするために、ギルダーツがお前さんを鍛えるからのう。」

そういわれ、俺が驚くよりも先にギルダーツという人の方が驚いていた

ギルダーツ：「いや、なんでだよ！？マスター。俺はクエストとかで忙しいだろ？マスターがやればいいだろ！」

マカロフ：「わしだって忙しいわい。それにワシは拳ではあまり戦わないからのう。拳で戦うお前さんが教えた方がいいじゃろ。マスターの命令じゃぞ。」

ギルダーツ：「つつ！はあ、わかったよ。クエストでほとんどいねえけど、その合間ぐらいには鍛えてやるよ。ただし、俺は手加減は苦手だからな、覚悟しておけよ。」

なんかいつの間にか俺が入ることが決定している。ギルドに入るにしても、このハチャメチャなギルドに入るのは少し抵抗もあるのだが、

マカロフ：「話はまとまったのう。じゃあ、

そう言ってじいさんは、俺に右手を差し出してくる。

この手を握るかはお前さん次第じゃ。この手を握り、ワシのギルドに入るか、それ以外の方法を探すかはお前さんが決めることじゃからのう。」

そう言われ、俺は右手を見ながら少し考える。だけど、俺の考えはもう出ていた。俺を救ってくれたギルドを、俺に生きる道を教えてくれたギルドの誘いを断るなんてできなかったんだから。そして俺も右手を差し出す。どんな幻想も殺せる右手で、握り返す。

それは、間違いなく現実だということを俺に教えてくれた。

こうして俺は、魔道士ギルドに入ることになった。妖精の尻尾へ。

フェアリーテイル

第3話〜鬼（ギルダーツ）との修行〜（前書き）

今回は当麻がフェアリーテイルに入ってからの日常です。そしてギルダーツとのバトル。戦闘シーンが難しい。

では投稿です。

第3話　鬼（ギルダーツ）との修行

当麻SIDE

俺がフェアリーテイルに入って一か月がたった。その間にいろいろなことがあった。まず俺の右手を説明したら、なんかギルド全員から魔法を撃ち込まれ、それを打ち消すと、驚かれ、さらにどんどん打ちこまれ、逃げなきゃいけないくなるわ、グレイからは会うたびに

グレイ：「俺ともう一回勝負しろよ。」

なんていわれ続けるわ、そして俺が初めて仕事をしようとしたら、今の俺にできることなんてたかが知れているわけで、呪いの解除ぐらいしかできることは無く、それをやりに行ったら、やはりいすべきなのか厄介ごとに巻き込まれ、魔道士が一人暴れていたのだからと戦うことになってしまったり、その戦いによって壊れたものはなぜか俺が弁償する羽目になってしまい報酬が無くなり、一緒に行ったグレイからは

グレイ：「おまえ、本当に不幸なんだな。」

と憐れむように言われ、やっとの思いで帰ってきたら、ギルダーツとの修行が待っており、そしてそこでも体がずたばろになるまで修行？をし（後に聞いた話だがギルダーツはフェアリーテイル最強候補だった）当面の生活費はじいさんに借りることができたので、俺はアパートを一部屋を借りることができたが、家の中でも数々の不幸な出来事が起こってしまうという、人の一生分の不幸を一か月に詰め込んだようなそんな一か月でし。そして今はギルドにいて、次の依頼を探していた。

「なんかいい依頼でもないのか。上条さんでも簡単にできるような仕事は？」

そんなことをリクエストボード（依頼を貼る場所）の前で考えていると、

グレイ：「ああ、当麻また依頼に行くのかよ？は、やめとけ、やめとけ。どうせまた不幸なことでも起こるんだろ？」

カナ：「ちょっとグレイ。でも麻つて本当に不幸だね。なんか、可愛そうになってくるぐらいに。」

と二人からそんなことを言われる。

「うっさい。二人とも!! わかってますよ。上条さんが不幸だつて
じとぐらい!」

そんなことを言い合っていると、酒場の机の上で座っていたじいさんが、

マカロフ：「なんじゃ？当麻。お前さん、今日はギルダーツとの修
行の日じゃなかったかのう？」

「しまった――！！！」

そうだ。そうだった。そういえば今日だった！。時計を見てみると、

わんばかりのギルダーツがそこにはいた。そしてそれを見てしまった俺は

「すいませんでした――！！」

そう言い、走りながらその勢いで、土下座をする。

ギルダーツ：「なんで遅れた？」

そういうギルダーツの声には、明らかに怒りが含まれていた。そんなギルダーツに嘘を言うわけにもいかず、

「私上条当麻の不注意であります。それ故どんな罰も受けますゆえ、どうか命だけは。」

俺が本気で命乞いをしていると、

ギルダーツ：「はあ、まあいい。それよりとつとつ、修業を始めるぞ。」

そう言われ、俺は少し驚いた。遅れた罰に、空中を飛ぶことになるパンチを受けるのかな？とかそんなことを考えていたのだが、そんなことはなくあっさりとギルダーツは言った。それが少し恐ろしくも感じたが、

「はい！！」

そういつた俺を見て、ギルダーツは

「じゃあいつも通りだ。俺と戦う。ただそれだけだ。」

そう。ギルダーツとの修行方法は至極簡単。ただギルダーツと戦えばいいだけなのだ。ギルダーツいわく、「お前みたいなのは、体で覚えた方が早えからな。俺と戦いながら体で覚えていくしかねえだろ。」らしい。しかし、俺にとってそれはまさに地獄。毎回毎回、死にかけることになるこの修行方法はどうなのだろうか。そう思い、

「はあ、あの〜ギルダーツさん。他に修行方法はないんでせう？この方法だと上条さんが強くなる前に体がもたないと思うんですが」

ギルダーツ：「前にも言っただろうが。お前みたいなのは、言葉で聞かせるよりも体で覚えた方がいいんだよ。逆に当麻、俺が説明したらお前しつかりと理解できるのかよ？」

・・・無理だろう。そう思ってしまふ。俺の頭は正直そこまで出来が良くない。

はあ、そんなこんなで結局俺はこの修行をやるしかないのだろう。強くならなきゃいけないんだからな。

「じゃあ、行くぞ！！」

ギルダーツ：「ああ。全力でな。」

言葉を交わすと、俺はギルダーツに向かって走り出す、俺の攻撃方法は拳しかない。なら近づくしかない。あの化け物に。そして拳の届く範囲に入り俺は右の拳を奴にぶつけようとする。しかし、

ギルダーツ：「遅えぞ。もっとスピードを上げねえか。」

そんな言葉と共に、俺の体は宙に浮く。ギルダーツが足で俺の足を払ったのだ。そして、空中でよけられない俺にギルダーツの拳が通る。

「つつぐはああー!!」

空中で殴られた俺の体はそのままの勢いで、吹っ飛ばされていく。そして

ドカァァン

木にぶつかりその勢いは止まる。だがそれは体の中の酸素が無くなるんじゃないかというくらいの衝撃だった。衝撃で考えられなくなる頭を何とか使い、今の状況を理解しようとする。

「（考える。ギルダーツに一撃を与える方法を。闇雲に突っ込んでも今みたいに簡単にあしらわれちゃうし、でも近づかない限り俺は攻撃できねえし、どうする?）」

ギルダーツ：「ほらどうした?もうダウンか。来ないならこっちから行くぜ。」

そう言いギルダーツが俺の元へ走ってくる。そしてあいつの拳が俺へ向かってくる。そして、

ギルダーツ：「おらあああつつー!!」

その拳を何とか体を回転させ避ける。だが

キーン

ギルダーツの拳と地面が激突するとそんな音が鳴り響く。するとその瞬間、地面が砕け散り、その破片と共に体が吹き飛ばされていく。

「ごがああっ」

体が地面を何度も回転し、ようやく勢いがなくなり、倒れ込む。ぐちつくしよう。やつぱりとんでもなく強ええ。身体能力も馬鹿げてるけど、ギルダーツの魔法

『クラッ シュ』

触れたものを破壊する魔法。俺の幻想殺しの何でもアリ版だ。しかも俺のように右手だけじゃないのである。今のだって、腕力だけじゃなく魔法を使い地面を吹き飛ばしやがった。その勢いで俺の体を吹き飛ばしたってわけだ。その魔法だって、俺の右手で触れれば消せることだってできる。だけどギルダーツはそんなレベルじゃない。倒せるか倒せないかなんてもんじゃない。触れることさえできない。だけど、俺は立ち上がらなきゃいけないんだよ！！

ギルダーツ：「ほら、早く立ち上がれ。俺に勝てなきゃ誰かを幸せになんてできねえんだぞ。」

そうだ。ギルダーツより強い魔道士なんて山のようにいるらしい（信じられねえけど）。けどそれが本当なら俺はギルダーツを倒せるぐらいにならなくちゃいけない。この右手で誰かを守るように、

「うおおおおおおおおおっ！っ！っ！」

そう叫びながら俺は立ち上がる。体はぎしぎしと痛む。立ち上がるだけで、体中から血が噴出してくる。けど、そんなものは関係ない。あいつに一撃を叩き込む。それだけだ。拳を思いつきり握る。血が出るぐらいの勢いで。そして、倒すべきギルダーツを睨みつける。

ギルダーツ：「へ、いい顔だな。そして、その覚悟。まだやる気なんだな。来いよ。幻想殺し。」

今にも体は倒れそうだ。だけど、駆け出す。ギルダーツの元へ。この拳をぶつけるために。

「「おらあああああつ！！」」

ゴンッ！！

二人の拳が互いの顔に叩き付けられる。そこで意識は無くなってしまった。だが、意識が飛んでしまう前に、ギルダーツの顔が見えた。そこには、笑みが浮かんでいた。

あ、意識が戻り視界に見えたのは、いつものフェアリーテイルの病室だった。俺はギルダーツとの修行が終わると、必ずここへ運ばれ

る。今ではもう、慣れてしまった。最初の頃はグレイやカナ、ほかの奴らもお見舞いに来てくれていたのだが、修業するたびに来るもんだからみんな来なくなってしまった。さびしくなんてないやい。

「・・・・」

それにしても、またここに来たということは、またやられてギルダーツに運ばれたのだろう。どんなにやってもその差は縮まらない。縮まる気がしなかった。

「（こんなん、本当にみんなを守れるようになるのかなあ？うーん。難しい話だよなあ。）」

そんなことを悶々と考えていると、

「???：「よう、起きたのか。体は大丈夫か？」

不意にそう言われ、声のした方を向くと、ずっとそこにいたのか、ギルダーツが立っていた。

「あゝ、体は大丈夫だな。修業で体は頑丈になってってるみたいだからな。後、ありがとうな、いつも運んでくれて。」

ギルダーツ：「はっは。気にすんな。それより今何を考えてた？真剣な顔をしてたが」

あー、見てたんっすか。嘘を言う必要もないので、素直に言う。

「いやゝ、何回やってもギルダーツさんの足元にも及ばないや」と、こんなことでみんなを守れるようになるのかなゝなんて、上条さん

に思ってみてたりしたわけでせうよ。」

そう俺が言い終わると、ギルダーツは笑った。豪快に。

ギルダーツ：「がははは。あつたりまえだ。俺が何年生きてると思つてんだよ。てめーみたいなひよっこに負けるかよ。だけど、お前は強くなってるよ。確実になあ。」

そう言われ、俺は、？となる。いつもいつも、ただボコボコにされてるだけの気が。俺が思っていることが分かったのか、

ギルダーツ：「その証拠に今日お前は俺に一撃を当てた。これは確実な進歩じゃねえか。」

そういえば、最後に一撃あてたような気もするが、

「いやいや、ギルダーツならあんなパンチ避けれただろ？それに力も入ってないピヨピヨパンチだったしな。入ったとは言わねえだろ、あれは。」

ギルダーツ：「どんなパンチだろうが入ったことは事実。素直に喜べよ。」

それもそうか。なら素直に喜んでおこう。そんなことを思っていると、

ギルダーツ：「俺に一撃あてられるようになったんだし、明日からの修業はもつときつくなくていくからなあ。まあ、頑張れよ。」

そう言つてギルダーツは部屋を出ていこうとする。しかし今聞き捨

てならない言葉を聞いてしまった。

「いや、ギルダーツさん!!??今でこんな瀕死状態なんでせうよ?これより強くなったら、上条さんは間違いなく三途の川を渡り切ってますよ!?!」

俺が反論するが、ギルダーツは笑いながら、部屋を出て行ってしま
う。

一人残された俺は、この理不尽な仕打ちにただ一人で叫ぶことしか
できなかった。

「不幸だ――――――――――!!!!」

第3話〜鬼（ギルダーツ）との修行〜（後書き）

次回はやっとエルザさんの登場です。

やっとフラグが建てられる。

第4話〜赤髪の少女との出会い〜（前書き）

どうもです。書き方を少し変えてみました。

やっとエルザが出せました。それでは投稿です。

第4話　赤髪の少女との出会い

当麻SIDE

フェアリーテイルに入ってから、一年が過ぎようとしていた。その間にもやはり不幸な目にあい続けて来た私こと上条当麻なのだった。そして今日も朝から、起きてフェアリーテイルに行こうと歩いていると、後ろから来た魔道四輪にひかれ、川に落ちる羽目になるわ、工事中の横を通り過ぎようとしたら、上から鉄骨が降ってくるとわと、散々な目にあっていた。はあ、

「不幸だ。」

そう言っていると、ギルドにたどり着いた。ギルドに着くと、

「うおっ！？当麻、なんでお前は体中濡れてんだよ？」

「おおっ！？本当だ、大丈夫？？」

グレイとカナの二人が俺に話しかけてくる。さすがに心配してくれてるようだ。そりゃそうだろう。朝っぱらからこんなずぶ濡れな奴がいれば誰だって気になるはずだ。

「いや、何ていうかいつも通りの不幸ですよー。ははは、はあ。」

もう乾いた笑いしかできねえ。まあ終わったことを考えても仕方ねえか。そうやって無理やり思考を変え、二人の方を見ると、カードを机に広げて何かをしていた。

「グレイとカナは何してんだ？」

そう俺が聞いてみると、カナが

「相変わらずだねえ。その不幸。これは私のカードで占いをやってるんだ。ああそつだ。当麻も占ってやるよ。」

占いねえ。不幸な俺がやつても意味がない気がするけど、まあ気休めぐらいにはなるのか？そう考え、

「じゃあ頼むわ。」

そついうと、カナはカードを広げ、占いを始める。そして、

「おお、よかったじゃない。今日の当麻の運勢、最高だつて。あつ！」

・・・これで最高！？朝っぱらから散々不幸な目にあっているというのにこれが上条さんの最高だつていうのか？はは。笑えてくる。これが最高つてもう救いようがねえじゃねえか。

「いやでも、これから何かすつげーいいことがあるかもしれないねえじゃねえか？なっ？」

さすがのグレイもそんな俺に同情したのか、フォローしてくる。

「いいんですよ。 그레이さん。 わかってましたよ。 上条さんが不幸だつてことくらいはさ。 はは、 やっぱりあれだ。」

ふこうだー」

そんなこともあり、今日も不幸絶賛中！！な上条さんだったが、急にギルド内がざわつき始めた。 なんだろう？ と思い、顔をあげてみると、

赤髪で、片目に眼帯をしていて、服はボロボロだったが、とても可愛らしい少女がそこにはいた。

「ここがロブおじいちゃんのいた所・・・」

？よくわからないことを言っていた。 しかしこのギルドに何か用なのだろうか？ もしかして、このギルドに入りたいとか？ それなら、一刻も早く止めなければ！！ あんな純粹そうな子がこんなギルドに入ることだけは！！ そう思い、俺はすぐに立ち上がり、彼女のもとへ向かう。

「えーと、ここに何か用でせう？」

そう俺が聞くと、彼女は俺の方へ顔を向け、

「・・・・・・・・・・」

・・・・

どうしよう。 何か言ってくれるかと思ったが、一切しゃべらず無言

でこっちを見ている。うーん、どうしよう？そんなことを考えていると、

「・・・」

彼女は何も言わず、進んで行ってしまう。

「おい待てって！」

そういつて、彼女を追いかけようとする俺だったが、

「っおわっ！??」

床に何かおいてあったのか、それに躓いてしまう。そしてその先にはさっきの彼女。つまりどういいうことになるかというと、

「っが」

「きゃあっ！？」

その勢いで倒れてしまう。

ついてて。くっそー。誰だよ。変なところに物置きやがって。はあ、不幸だ。そんなことを考えながら、起きようと手を置こうとすると、
ふにっ

ん？なんだろう？何か小さくて柔らかいものに触れたような感触が帰ってきた。その感触の正体を見ると、

.....

彼女がそこに倒れていて、彼女のつつましい胸に俺の手があった。どうやら俺は彼女を押し倒してしまったようだった。その考えに達し、彼女の顔を見ると、

「んん、！！???」

この状況がどういう状況なのか気づくと、顔をトマトのように赤らめ、動揺していた。

「え~~~~と、これは何と言いますか。足に置いてあったものに躓いて、あなた様も巻き込んで倒れてしまい、それで起きようとしたら、間違えてあなた様の胸に触れてしまっただけでありまして、決して邪な考えはありませんのことよ?」

動揺する頭で必死に弁解しているが、彼女の耳には入っていないように、

「~~~~~//////。ど、どけーーーーー!!!!」

そう言いながら、彼女は拳を握りしめ、そして

ドゴッッ!!

そんな鈍い打撃音とともに俺は空中へ投げ出されたのであった。俺を殴り飛ばした彼女は、顔を赤くしたまま、ギルドを飛び出しているってしまった。そんな俺たち二人を見ていたギルドの奴らは最初はポカーンとしていたが、

[illegible]

「おい当麻。始めてあつた女の子をいきなり押し倒すなんてやるじやねえか。」

「やるじゃねえか。当麻。」

好き勝手言い始めやがる。殴られた顔をさすりながら、

「ちげーよ。足に何かあつてたまたま躓いちまったんだけだぞ。ええそうです。上条さんはたまたま不幸にもそうなってしまっただけでせうよ……!」

そう弁解するも、誰もそんなことは聞いておらず、勝手に騒ぎ始めていた。くっそー、それにしても彼女はいつたい何の用だったんだ？俺のせいで聞きそびれちゃったなー。でも大事な用事があればまた来てくれるのかな。そう考えながら、グレイとカナのもとに行く

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

すごく冷たい視線が俺に突き刺さった。

「いや、あのお二人さん。さつきも言った通り、狙ったとかそんなんじゃないですね、たまたま不幸にもあぁなってしまうただけなんですせうよ!!」

そうやってもう何度目かわからないが、弁解を始めるた俺だったが、グレイは話を聞かずに

「俺が言うのは初めてかもな。はは。うっせーぞ、『変態』」

「いえーい。言われると思ってましたよ！こんちくしょう！ーくっそー、何が今日の運は『最高』ですだよ？これから変態として扱われるこんな日がどうしてなんだー？くっそーやっぱ不幸だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

そんなことを叫びながら、崩れ落ちると、カナが

「それにしても、あの子なんだったんだろうね？変態のせいでわからなかったけど。」

「変態言っなー！はあ、だけど本当になんだったんだろうな？あの格好から見て普通じゃなさそうだったけど。」

そう言っつて、少し考え込むと、

「気にすることねーだろ。何か用があればまた来るだろ？それより当麻、お前今日ギルダーツとの修行だろ。のんびりしていいのによ？」

グレイに言われ、俺はハツとする。そうだったー、あの子のことがあったから忘れていたが、今日は修行の日だったー、そう考えながら、時計を見ると、もうすぐ修行の時間だった。これならば、

「くっそー！ーいやまだ走れば間に合う。かみじょうさんはあきらめませんのことよー！ー！ー！ー！」

俺は全力で走り出す。なんか前にもこんなことがあったなーとか思いながら全力で。

当然間に合わず、いつも以上にボコボコにされた上条当麻がいたのは、言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0877y/>

とある魔法の妖精尻尾（フェアリーテイル）

2011年11月4日07時04分発行